

キャサリン・マンズフィールド作  
桃山まや訳

## ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

### 第十話 疲れた子

少女はちょうど白い小道を歩き始めたところだった。小道の両側には黒くて高い木が並んでいた。小道はどこへ向かうでもなく、ほかに歩く人影もなかった。するとその時、誰かが少女の肩をぐいっとつかみ、耳に平手打ちを食らわせた。

「いや、いや、止めないで」疲れた少女は叫び声を上げた。「お願いだから行かせて」「いつまで寝てるのさ、この役立たずが」と声が言った。「さつさと起きてかまどに火をおつけ。さもないと骨がばらばらになるまで叩いてやるよ」

少女がようやく目をあけると、奥さんがわきの下に赤ん坊を抱えて立っていた。同じベッドには三人の子供たちも寝ていたが、奥さんのどなり声には慣れていたので、まだぐっすりと眠っていた。部屋の隅では旦那さんがズボンつりを留めていた。

「いったいどういふつもりなんだい、一晩中眠りこけて　これじゃ芋袋とかわらないじゃないか。おかげでこの子に二度もベッドを濡らされたよ」

少女は何も言わずにペチコートの紐を縛り、凍えた指で格子縞の上着のボタンを留めていた。

「さつさとおしよ。この子を連れて台所へ行ったら、すぐにコーヒーをアルコールランプで温めるんだよ。それからテーブルの引き出しに黒パンが入っているから旦那さんに食べさせておくれ。言っとくけど、あんたが食べたら、承知しないよ」

奥さんはよろめきながら部屋を横切り、ベッドにもぐりこんでピンク色の長枕を肩のあたりに引き寄せた。

台所はまだ暗かった。少女は赤ん坊を木製の長いすに寝かせてショールでくるみ、コーヒーを瀬戸物のポットから手鍋に移してアルコールランプの上に置いた。

「眠たいわ」疲れた少女はうつうつとしながら、床にひざをつけて湿った薪を割っていた。「だから目が覚めないのね」

火をおこすのにずいぶん手間取ってしまった。もしかしたら、かまども少女のように

「こごえていたのかもしれない。それとも眠たかったのだろうか……いや、きっと、両側に黒くて高い木の並んだ白い小道の夢を見ていたのだろう。どこへ続くともわからないあの白い小道の夢を。」

その時、勢いよくドアが開いて旦那さんが姿を現した。

「そんなところで何をしているんだ」旦那さんがどなった。「コーヒーをくれないか。時間がないんだ。おい、まだテーブルの上を拭いてないぞ」

少女は立ち上がってエナメルのカップにコーヒーを注ぎ、パンとナイフを用意した。そして流しから雑巾を持ってきて、リノリウムを張ったテーブルの上を拭いた。

「まったくくさくさするぜ」旦那さんがつぶやいた。テーブルのそばに腰を下ろし、窓の向こうに広がる、あざのように膨れ上がった空を眺めていた。空は眠ったままの大地に重たくのしかかっているように見えた。旦那さんは口の中にパンを詰め込んで、コーヒーと一緒に流し込んだ。

少女はバケツに水を汲み、上着の袖をたくしあげた。そして成長の止まった小枝みたいに細い腕を叱りつけるような顔でしばらくにらんでから、モップで床の上を拭き始めた。

「そんなことは俺が出かけてからにしてくれよ」旦那さんが言った。「それよりも赤ん坊をおとなしくさせてくれないか。一晩中泣いてたぞ」

少女は赤ん坊を抱きあげ、腰をおろしてゆすった。

「よし、よし、よし」少女が言った。「坊やには糸切り歯が生えてきたんです。だから泣いてばかりいるんです。それによだれが　　こんなによだれを垂らす赤ん坊はみたことがありません」少女はスカートをつまんで赤ん坊のよだれと鼻水を拭いた。「中には気の付かないうちに歯が生えてしまう子もいるそうですけど」少女は続けた。「坊やみたいに泣いてばかりいる赤ん坊もいるそうです。そういうえば、死んだ赤ん坊のお腹の中に歯が生えていたっていう話を聞いたことがあります」

旦那さんは立ち上がり、ドアのフックからマントをはずして肩にかけた。

「次のがまたできたんだ」

「えっ！　　次の歯ですって！」それまでの眠気がいっぺんに吹き飛んでしまうほど驚いて、少女は赤ん坊の口のなかを指で探った。

「そうじゃない」旦那さんはじれったそうに言った。「また赤ん坊が生まれるんだ。ほら、さっさとしないか、子供達が学校へ行く時間だぞ」少女はその場に突っ立つたまま、石の廊下を遠ざかっていく旦那さんの重たい足音を聞いていた。足音は砂利道へ抜け、表の門がぱたんと閉まるまで続いた。

「また子供が生まれるの？　　奥さんはもう子供を産むのをやめたんじゃないの？」

少女は考えた。「糸切り歯の生えかかった赤ん坊が一人になる　　夜中にあたしを起こす赤ん坊が二人になる　　抱っこする赤ん坊も二人なら洗うおむつも二人分になる！」

少女は腕の中にいる赤ん坊を見てぞっとした。疲れた眼の中には蔑むような苛立ちが宿

つていた。赤ん坊はそれを感じ取ったように、こぶしを握りしめ、身体をこわばらせて激しく泣き始めた。

「よし、よし、よし」少女は赤ん坊を長椅子におろし、ふたたび床の掃除を始めた。赤ん坊はしばらく泣きやまなかった。しかし赤ん坊の泣き声にはなれていたもので、少女が箒を持つ手を休めることはなかった。ああ、少女はどれほど疲れていただろう！ 重い箒の柄、首の後ろの焼けつくような痛み、背中の腰紐のあたりにかすかに感じる奇妙な痙攣。いまにもどこかが壊れてしまいそうだった。

時計が六時を告げた。少女はミルク鍋をかまどにかけたまま隣の部屋へ行った。三人の子供達を起こして着替えさせなければならぬ。アントンとハンスは、起きている時には考えられないほど仲良く寄り添って眠っていた。レーナは膝をあこの下に入れて丸まっている。おさげ髪だけが枕の上にピンと伸びていた。

「さあ、起きるのよ」少女は上掛けをはがし、男の子たちをつつきながら、ひどく大人びた声で言った。「二十分も前から呼んでいるのよ。もう遅いのよ。さっさと着がえないと奥さんに言いつけるわよ」

アントンは寝返りをつつて目を覚ますと、ハンスの泣き所を蹴った。するとハンスがレーナのおさげ髪を引っ張り、レーナは金切り声をあげて母親を呼んだ。

「しっ、静かに」少女が小声でささやいた。「さあ、起きて着替えるのよ。早くしないとどんなことになるかわかってるでしょ。ほら、手伝ってあげるから」

けれど、その警告は遅すぎた。奥さんはベッドから下りて迷わず台所へ行き、丈夫な紐で結わえた小枝の束を持ってきた。そして子どもたちを一人ずつ膝の上に乗せてこっぴどく叩き、最後に残った力を振り絞って少女に一撃を加えると、どこおりなく母親の務めを果たしたことに満足して、ふたたびベッドへ戻って行った。子供達はしゅんとしていた。服を着る時も顔を洗う時も少女のなすがままにされていた。少女は男の子達のブーツの紐まで結んでやらなければならなかった。放っておいたら、つま先が靴の出っ張りにおさまるまで、少なくとも五分はかかるのを知っていたからだ。それに、そこから中をびよんぴよん跳ねまわったあげく、つばを吹きかけた手で靴紐をねじりきってしまっかもしれなかった。

食事をしている間に、子どもたちは持ち前の元気を取り戻していった。おまけに赤ん坊はちっとも泣きやむ気配を見せなかった。少女は、哺乳瓶にミルクを入れ、ゴムの乳首を口に含んで少し湿らせてから、なだめすかして赤ん坊の口に持っていった。けれど、赤ん坊は哺乳瓶を床になげ、全身を震わせて泣くばかりだった。

「糸切り歯だよ！」ハンスは空になったカップでアントンの頭を叩きながら言った。「邪悪な糸切り歯が生えてきたんだ」

「偉そうに！」レーナがハンスに向かって舌を出した。しかしハンスがさかさず同じことをすると、大声をあげて泣き叫んだ。「ママ、ハンスがあたしにべーってやったの！」「そうやってるよ」ハンスが言った。「好きなだけわめけばいいさ。そのかわり、今夜

お前が眠ったら、その細い腕をぐるぐるねじって、しまいに「ハンスはテーブルの上に身を乗り出して、レーナに向かって恐ろしい顔をした。坊主頭につばを吹きかけられるまで、アントンが後ろに立っていることには気づかなかつた。

「イエーイ！ イエーイ！」

少女は押したり引っ張ったりして二人を引き離し、コートにくるんで家から追いたてた。

「急いで！急いで！二度目のベルが鳴ったわよ」少女はわざと嘘をつき、得意になって子供達をせきたてた。それから朝食の片付けをすませ、じゃがいもと赤カブを取りに地下室へ下りて行った。

石炭置場ってなんて寒くて不思議なところなんだろう！隅の方に積んであるジャガイを相手に、古いらつそく箱の中の赤カブや、二つの樽に詰まったザワークラウトや、ねじ曲がったダリアの球根たちが　まるで本気になって戦いを挑んでいるみたいだ。少女はそう思った。

少女はスカートの中にジャガイモを入れた。皮がむきやすいように、なるべく大きくて芽が出ていないものを選んだ。そしていつのまにか、山積みになったジャガイモの上に屈みこむような格好で居眠りを始めていた。

「ちょっとあんた、そんなところで何をしているんだい？」階段の上から奥さんのどなる声が聞こえた。「坊やが椅子から落っこちて、目の上に卵みたいに大きなこぶをこさえちまったじゃないか。性根をたたきなおしてやるから、さっさとあがっておいで」

「あたしのせいじゃありません　あたしのせいじゃありません！」少女は叫んだ。叩かれながらホルのなかを逃げ回っている間に、じゃがいもと赤カブがスカートの中から転がり落ちていった。

奥さんは巨人のように大きく見えた。その動きには、幼いものをすくみあがらせるほどの威力があった。

「その隅でジャガイモの皮をむいとくれ。洗い終わったらこの子のお守をするんだよ。あたしは洗濯をしてくるから」

少女はしくしく泣きながら奥さんの言葉に従った。けれど、赤ん坊をおとなしくさせることはできなかった。赤ん坊は顔を真っ赤にして、細かい汗の粒を頭から流しながらひきつったように泣きじゃくっている。少女は赤ん坊を膝の上にのせ、洗い桶と、ジャガイモの皮を入れるための、アヒルの餌入れを自分のそばに引き寄せた。

「よし、よし、よし」少女はジャガイモの皮をむき、芽を削り取りながら赤ん坊をあやしつづけた。「もつじき次の赤ちゃんが生まれるんですって。お願いだから二人で一緒に泣いたりしないでね。あんたはどうして眠らないの？　あたしがあんなだったらすぐに眠ってしまうのに。そっだ、あたしが見た夢のお話をしてあげる。むかしむかし、あるところに白い小道がありました」

少女は顔をあげて頭を振った。のどの中がうずき、涙がジャガイモの上にこぼれ落ち

た。

「こんなお話はつまらないかしら」少女はそう言って涙を振り払った。「このお仕事ですむまではおとなしくしていてね、そしたら抱っこして歩いてあげるから」

けれど、少女にはまだ奥さんの洗濯物を干すという仕事が残っていた。風が吹いてきた。つま先立ちになって洗濯物を干していると、いまにも吹き飛ばされそうな気がした。半分水につかったアヒル小屋からは、鼻を突くような臭いが流れていたが、草原を見渡すと、緑色の草が髪の毛のように波打っているのがわかった。少女はある話を思い出した。それは本物のソーセージとビールを持って一日じゅう草原で遊んだ子供の話だった。そういえば、その子供はちつとも疲れなかったって言うていた。あの話をしてくれたのは誰だったかしら？ それを思い出すことはできなかったが、今でもあの話ははつきりと覚えていた。

洗濯物を洗濯バサミで留めていると、濡れた衣類が風にはためいて少女の顔を打った。一列に並んだ洗濯物が、踊ったり、跳ねたり、膨らんだり、ねじれたりしていた。少女はなごりおしそくに草原を眺めながら、のろのろと家の中に入っていった。

「次は何をしたらいいですか？」少女がたずねた。

「ベッドを整えたら赤ん坊のマットレスを干しておくれ。それがすんだら、坊やを乳母車に乗せてそのへんを歩いておいで。いいかい、家の前から離れたらいけないよ。あたしの眼の届くところにいるんだよ。そんな所でぼかんと突っ立ってるんじゃないよ！ あたしが呼んだら戻ってきてサラダを作る手伝いをするんだからね」

少女はベッドを整えると、脇に立ってしばらく見下ろしていた。枕をそつと手で、それからほんのすこしだけ頭をのせてみた。するとまた、のどの中がづいいて涙がとめどなくこぼれた。赤ん坊に服を着せている時も、小さな乳母車を押して通りを行ったり来たりしている時も、涙がとまることはなかった。

牛に荷車をひかせた男が一人通り過ぎて行った。男は帽子に奇妙な羽を付け、すれ違いざまにヒュッと口笛を鳴らした。すると今度は肩に荷物を担いた娘がふたり村からやってきた。ひとりは青いハンカチを、もうひとりは赤いハンカチを頭に巻いていた。二人は手をつないで楽しそうに笑っていた。やがてお日さまが分厚い雲から顔を出し、あたりに黄色い暖かな光をそそいだ。

「もしかしたら」疲れ切った少女は考えた。「この道をどこまでも歩いていったら、あの白い小道に行き当たるかもしれない、道の両側に黒くて高い木の並んだ  
あの小道に」

「サラダ、サラダだよ！」家の中から奥さんの声が聞こえた。

やがて子供達が学校から戻り、食事が始まった。旦那さんは自分の分がなくなると、奥さんのプディングにまで手を出した。三人の子供たちは、食べる物をはじめから身体じゅうに塗りたいくっついているように見えた。そしてまた皿洗、洗濯、子守。こうして少女の午後はだらだらと味気なく過ぎて行った。

グラドールの奥さんが新鮮な豚肉を持ってやってきた。少女は二人のうわさ話に聞き耳を立てた。

「昨日の夜、マンダさんの奥さんが、例の\*ローマ旅行に出かけてね、女の赤ん坊を連れて戻ってきたのよ。あんたのほうはどうなの？」

「今朝は二度もつわりがあつて」奥さんが答えた。「立て続けにできたもんだから、お腹の中がどうにかなつちまつたみたいよ」

「新しいお手伝いが来たみたいだね」グラドールの奥さんが言った。

「あら」奥さんは声をひそめた。「まだ言つてなかつた？ 父なし子でね あの子の母親は駅でウェイトレスをしているのよ。水差しの中にあの子の頭を突っ込もうとしているところを見つかつたんだって。それがもとで頭がおかしくなつちまつたみたいだよ」

「よし、よし、よし！」少女はそつとささやいた。

日暮れが近づいていた。少女はもはや眠気をどうすることもできなくなっていた。腰を下ろすのもじつと立っているのも怖かった。夕食のあいだじゅう、奥さんと旦那さんの身体が大きく膨れあがつたり、人形よりも小さくしぼんだりしていた。二人の話声は遠く、まるで窓の外から聞こえてくるようだった。赤ん坊を見ても、突然頭が二つになつたり、消えてなくなつたりするのだった。耳障りな泣き声さえ、少女を眠りに誘っているように感じられた。もつじきベッドに入れると思うだけで、身体中を喜びが駆け巡つた。けれど、八時まであとわずかという時になって、わだちの音が通りに聞こえ、ほとんど数人の客が現れた。

それが始まりだった。

「コーヒーを入れておくれ」

「砂糖入れを持ってきておくれ」

「寝室から椅子を運んでおくれ」

「テーブルの準備をしておくれ」

そして最後に、隣の部屋で赤ん坊のお守りをしているように言われた。

エナメルを塗つた燭台の上で小さなろうそくが燃えていた。少女は部屋の中を行ったり来たりしながら、赤ん坊を抱いた自分の影が、壁の上に大きくうつつているのを見ていた。それは大人が大人みたいな赤ん坊を抱いているように見えた。赤ん坊が二人になつたら、どんな影になるだろう！

「よし、よし、よし！ むかしむかし、ある女の子が白い小道を歩いていました。道の両側には黒くて高い木が並んでいました」

「ねえ、ちよつと！」奥さんの声が出た。「ドアの後ろに掛かつてるあたしの上着を持ってきておくれ」少女は奥さんの上着を持って暖かい部屋に入つていった。すると客の一人が言った。「なんだかフクロウみたいな子だね。こつこつ子にはまともなのがいたためしがないのよ」

「どうしておまえは赤ん坊をおとなしくさせておけないんだ？」と旦那さんが言った。すっかり酔いがまわって、この屋の主であることを誇示するような口調だった。

「赤ん坊を黙らせることができなかったら、後でどうなるかわかってるんだろっな」少女はよろめきながら寝室に戻っていった。それを見て皆がどつと笑った。

「きつとマリア様にだつて坊やおとなしくさせることはできないわ」少女はつぶやいた。「イエスさまも小さい時はこんなふうに泣いたのかしら？ あたしだつてこんなに疲れていなければ、坊やを寝かしつけることができたかもしれないのに……いいえ、そうじゃない、坊やはあたしが眠りたがっていることを知ってるんだわ。そしてもうじき赤ん坊が生まれるってことも」

少女は赤ん坊をベッドの上に放り出し、おそろしい顔で見下ろした。隣の部屋からはガラスのぶつかり合う音とくぐもった笑い声が聞こえていた。

すると突然、少女の中にとつともない考えがひらめいた。

少女はその日初めて笑った。手をたたきながら笑った。

「よし、よし、よし」少女はささやいた。「ちよつと待っててね、おバカちゃん。きつと眠れるようにしてあげるから。もう泣くこともないのよ、夜中に起きることもない。あなたはほんとに憎たらしいおバカちゃんよ」

眼を開けた赤ん坊は、少女の顔をみて大声で泣き叫んだ。隣の部屋から、奥さんのどなる声が聞こえた。

「もう少しです 今寝つくところですから」少女は答えた。

そしてかすかに笑いながら、奥さんのベッドからこつそりピンク色の長枕を持ってくと、赤ん坊の顔にかぶせて力いっぱい押し付けた。赤ん坊はしばらくもがいていた。「まるで首を落とされてのたうちまわるアヒルみたい」少女はそう思った。

少女はふーっと息を吐いてあおむけに倒れると、白い小道を歩いていた。道の両側には黒くて高い木が並んでいた。その道はどこへ向かうでもなく、ほかに歩く人影もなかった。

\* 出産を長旅にたとえている。第七話『レーマンの店』に既出。